第４回高知県社会教育委員会（平成 24 年８月１日～平成 26 年７月 31 日任期）会議概要

平成 25 年 10 月 31 日（木）13:00～16:00

高知県庁西庁舎　２階　教育委員室

１．開会（１３：００～１３：０５）

（１）高知県社会教育委員会委員長挨拶

（２）高知県教育委員会事務局生涯学習課長挨拶

２．議事（１３：０５～１６：００）

⑴第１回目から３回目までの協議内容のまとめ

【事務局より説明】

（委員長）

第１回目から３回目までの協議内容のまとめについて、意見があれば言ってほしい。

（委員）

教育の視点には「人づくり」、「人育て」があるが、生涯学習からみると、「人育ち」という自らが育っていくという視点が必要ではないだろうか。地域というのは、育てる、人づくりをするだけでなく、住民自らが、住民としての自治能力をあげていくための自分育ちをどう支援していくかという視点がいるのではないか。

（委員長）

委員会として提案１、提案２のように、５つの提案というような形を出していくのもよい。

また、実践が沢山出てきている。モデルではないが、豊かな実践を紹介していくのも大事である。市町村のところを県の社会教育委員会がどう描いて提案していくか。中身を読んでみるとしっかりしろと言っているだけになっている。市町村の条件が悪いというだけになってはいけない。

（委員）

行政側から見るスタンスやアングルをかえると、景色がかわる場合がある。社会教育でいう教育の部分を支援という言葉がどうなのか。まさに自分で育つということを言っていたが、最終的には地域や人が自動的に動き出せば非常にいいわけであり、どのようにアシストすればタービンがまわりはじめるのか、ここにある実践例も踏まえながら意識をしていかなければならない。

（委員長）

プログラムの組み方自体にもしっかりとした考えを入れる。条件を整えること以上に、講座、教室などのプログラムをみて、自らが育つ仕組みになっているかどうか考えていきたい。

⑵社会教育関係団体の現状と課題、支援の在り方について

【婦人会の説明】

【青年団の説明】

【質疑・協議】

（委員）

婦人会にとって会員の減少は課題である。以前は会員が３万人ぐらいいたが、現在は約 6,000 人となっている。一番

影響しているのは、高知市が休会していることと南国市が脱会したことが大きい。

ただ、明るい話題もある。健康づくり婦人会では一般の人の受診啓発をしているが、受診率が低い町の町長に会いに行き、話をさせてもらった。町長は婦人会という組織があることを全然知らなかったようで、前向きに考えたいということだった。

隣の市町村へも行き、平成 19 年から休会している婦人会を復活させてもらいたいという話をした。しかし、様々な団体が地域を盛り上げており、とくに婦人会がなくてもやっていけるので、困ったらつくることを考えると言われ、残念な気持ちで帰ってきた。やはり、首長の考えが大きく響いていることを痛感した。休会している婦人会に対し、前向きな考えの首長だったら、もっと大きく組織を広げられるのではないかと感じた。

（委員長）

婦人会と青年団それぞれ話してもらったが、新しい動き、あるいはその必要性は高まってきていると思う。

（委員）

東日本大震災のときには、婦人会組織がある地域とない地域では支援体制が違っていたという話をよく聞く。地域をよく知っている婦人会組織は大切だと思う。

（委員長）

婦人会をバックアップしている県の取組や施策はどうであるか。現状はとてもいいと思うが、より積極的に研修を組むことなど考えられるのではないか。自主活動もあるが、講演会や学習会など自分たちを高めるための活動を一方でやっている。外に向けてのいろいろなサービス活動もあるが、援助などがもっとあってもいいように思う。そういう意味で、どういう方向で支援をしていったらいいのか考えてみたい。

（委員）

私の経験から、健康づくりの広報や施策を打ち出すときに、婦人会には大変世話になった。県が財政難のときに、コストのかけ方について考えさせられたときがあった。婦人会の協力がなければ健康づくりの質が落ち、それから派生する医療費に換算すると、かなりの支出を伴うものになる。だから、婦人会の活動を増やすという格好で健康づくりに投下することが、結果的には相当の支出の歯止めにつながるということになる。自発的にやってもらう活動によって、本来公費を伴って出ていくものが、どれだけガードされているかを示して、行政のお金を握っているところとしのぎ合うというのも１つだと思う。

それから、文学館ではサポーターが 76 名ぐらいいて、いろいろな活動をしてくれている。そんな中、若い人たちにどうすれば入ってもらえるか、また、後継者をどうするかということを、今年も１年かけて研修を組んだりしたが、婦人会の若い人の動きはどうか。

（委員）

この間、全国大会でも話題になったが、講演をすることも必要である。ただ、男女共同参画を進めるとか地域力を高めるための活動など、いろいろな学習会を持つ中で、そうした会場へ一堂に集めた学習ばかりしていては、今の若い人はなかなか集まらない。だから、10 のうち８を娯楽に持っていったらよい。昔のような固い考えでは会員は入らないので時代とともに考え方を変えていかなければならないという意見が出ていた。確かに会員の加入を促進するとき、研修旅行に誘い、それを機会に会員になってもらったりした。学習会に誘っても、なかなか集まらないが、娯楽的なことをきっかけに声がけをしたら会員になってくれたこともある。

（委員）

県下的にも婦人会員は、年齢がだいぶ高くなっているように思う。

（委員）

年齢は高くなっている。また、婦人会に入ってどんなメリットがあるか聞かれるが、それは活動してみないと分からない。お金では買えないメリットである。以前、老人施設へ訪問したときに、高齢者の人が涙を流して感謝してくれた、そのような声を聞いたときに、まさにそれがメリットであると言う。しかし、人口減少問題もあり、若い人はよく働いているので、なかなか時間の余裕がないということもある。

（委員）

私の友人で、退職後に地域の婦人会へ入っていた人がいた。その時は、一番若いという理由から会長を任されたのだが、体の調子も悪くなり家庭の事情もあったので、次の人に替わってほしいと言ったのだが、会長を引き受けてくれる人がいなかった。休会にするという話も出たが、周りでサポートするからということで、何とか会長を続けてもらったという話を聞いた。

あと、車の免許を持っていない人や高齢で運転をしなくなった人は、自分で出かける手段が無いので、思うような活動が活発にできないと悩んでいる人がいた。それに対し、どうやって周りが助け、会議にも誰かと一緒に行くことができるようになればいい、というような内容の悩みを聞いたことがある。

（委員）

休会をしている理由は、大体がリーダーや役員になる人がいないからである。ただ、県の組織からは退くが、地元で婦人会活動を続けるというところもある。県の組織に入って活動することも意義があると訴えているが、なかなか受け入れてもらえない。私たちは行政から指導してもらっているが、その人たちが退職したら、すぐに婦人会に入ってもらって一緒に活動したいと思っているが、退職した人たちも２～３年はゆっくりしたいということでなかなか入ってもらえない。

（委員長）

青年団でも、現代の若者の活動と青年団との出会いをどのようにつくっていくかが大事なところである。婦人会の場合も社会教育・生涯学習や女性問題学習、あるいは女性の持つ固有の課題とどう向き合っていくか、その婦人会との接点をどのように組み合わせることができるのか、意図的に考えてみることが活性化につながると思う。

（委員）

地域は男性・女性に限らず、ともに支えている。婦人会の会員減少は全国的な傾向なので、地域によっては、男性に賛助会員になってもらっているところがある。

（委員）

私たちの地域には婦人会がないので、女性の力を結集する時には、地域にあるＪＡの女性部や自主防災組織の婦人部などの協力を求める。私たちは大きな行事をするときに必ず後援団体として、その団体に呼びかけをしていく。そして、分担を決めて協力をお願いする。他団体の行事に協力することによって、グループ同士の交流もできると喜んでいた。

青年団についても、越知町の横畠青年団の誕生で、地域が非常にいい方向にいっている。高齢化が進む地域の中で、青年団が地域の草刈りなどを引き受けると、地域で非常に喜ばれる。少しだけどもらった謝礼で若い者同士が交流し合う。そういう和の力が発揮されて、しばらく途絶えていた地域の祭りの担い手に、今青年団がなりつつある。

青年団も婦人会も、その減少傾向に歯止めをかけることは難しい。だから、すべての地域に婦人会も青年団もないといけないと考えなくていいのではないか。その地域で活動が活発な団体が、機関車的役割で他の団体を牽引していきながら地域活性化の中心になり、地域の団体やグループの協議会的なまとまりを創ればいい。青年層も青年グループ協議会のような形をつくり、それぞれのボランティア団体やサークルの人たちに集まってもらい、何か共通の行事を開催したり、行政の委託事業をやったりすることにより、活動資金をつくることができる。

社会教育関係団体が大きく育つことは望ましいことだが、今の状況ではなかなか難しい。少し発想を変えて、地域に今ある力を結集し、自分たちの学びの場、育ちの場にしていくことが必要に思う。その仕掛けを社会教育が中心になってやってほしいし、指導的な役割を市町村の社会教育担当者がぜひ担ってほしい。

（委員）

大きい市町村では、婦人会の復活というのはなかなか難しい。小さい組織だけれどもまとまりがあり、自分たちの地域は自分たちで守らなければということで復活した地域もある。

（委員長）

この社会教育委員の会議自体が、地域の絆づくりや地域づくりということを言っているが、その核になるものは多様である。その地域の歴史や文化に根ざした核があるはずである。その核をどう発見していくか、それが婦人会の場合も

あるだろうし、青年団の場合もあると思う。そこでその核をどのように活性化させていくかが非常に大事であり、論議をしていく必要がある。

⑶ＮＰＯ団体・民間との連携、協働について

【ＮＰＯとかの元気村の説明】

（委員長）
地域をつくる、あるいは絆をつくっていくというさまざまな知恵と工夫は、この取組の中からたくさん出てきたと思う。そういったものを知らせていきながら、それぞれの地域で活性化する取組を紹介してもらった。
その関係団体自体をどのように支援していくかということもあるが、地域の核、地域をつくるという１つの方向性があるように思う。
また、事務局より県内のＮＰＯ団体の一覧を出してもらったが、社会教育・生涯学習あるいは教育委員会が斗賀野のようなＮＰＯとどう向き合っていくのか。ややもすると、首長部局に任せておけばいいというふうになりがちになってしまう。一方、婦人会や青年団、ＰＴＡという社会教育関係団体という枠においては、これは教育委員会の担当であるという、ある種の固定観念がある。そこをもう一度、社会教育・生涯学習の方からどう組み直していくかということも考えられると思う。
行政側の意識の変化がみられたという話もあったが、斗賀野の場合には佐川町とどのような関係性をもっているのか。
（委員）
町の方には、元気村の活動で、その地域が活性化してきたということで、何かをするときには安心して任せることができると思ってもらえるようになった。それで今度は逆に町の方へ、実はこういう課題があるがこれはどうなのかということを持っていき、検討してもらうという形で連携していくと、協働という意味でうまくかみ合っていくのではないか。町の職員でも元気村に入っている人がおり、行政にいろいろなことで一番助けてもらっているのは、我々が指定管理をしている図書館である。運営の面で任しているからというだけでなく、教育委員会自体が元気村が大事なものだという意識に変わってきた。
今までは、県の図書館協議会や館長会に誰も出席していなかったようで、ただ本の貸し出しをしているだけであった。それを自分たちが意識を変え、情熱を持って一生懸命やることにより、私たちの方から変わっていることを認めてもらえつつあると感じる。
（委員長）
私はよく社会教育・生涯学習とは、やる気づくり・関係づくり・学びづくりと言うが、行政とＮＰＯとの関係性も、お互いに前向きな要求が出せるような関係に変わってきている。
（委員）
町は何にもしてくれないと言って、行政の批判ばかりして動かなかった住民が、組織で活動するようになり、行政への見方が変わり声も静まっていった。
（委員）
芳原は、自治会や公民館という従来からある組織を生かした地域づくりである。一方斗賀野の元気村の活動は、会費を取って自覚的に集まった集団が、自分たちの趣味や好みを超えて地域づくりを始めたという活動で学ぶことが多いと思う。条件や仕掛けが揃えば都市部でもできる地域づくりの形をこの元気村は示してくれた。県内でこれだけのＮＰＯ団体が登録されているのであれば、何らかの風を起こせば、そこに１つの地域づくり・まちづくりという空気ができあがっていく可能性は随分あると思う。そうなったときに社会教育の役割は何かということになれば、その核になる人間をどう育てていくのかということだろう。所属にとらわれず、社会教育の視点を持った人材が育っていくことが地域づくりの大きな展望につながっていくのではないか。

（委員）

元気村は子どもたちにも浸透しており、何より子どもたちが育っている。学校の芝生化をしたとき、ＰＴＡと一緒になって活動をした。その時に、元気村のメンバーばかりがやっていて若い人がやらなくなったらいけないということで、芝刈りの指導をした。今ではＰＴＡが１週間に１回、輪番制でやっており、活動が非常にしっかりしてきた。

（委員長）

越知町の青年団の紹介があったが、同じような感じで今動き始めている。自分たちが地域に役立っているという実感を持ちながら、みんなで元気を出している。同じような知恵と工夫の視点があるように思う。婦人会の取組の中でも、こういうところで生き生きしてきているという場面がたくさんあると思う。

今日は話題になってないが、社会教育関係団体ではＰＴＡも大事であり、どのような知恵と工夫で運営していったらよいのか、時間があれば議論したいと思う。

施設の運営についても、どのように広げていくか、運営していくかということが、斗賀野の取組と非常に重なる部分がある。

（委員）

協力しあっての仕事を考える場合、５０：５０（フィフティフィフティ）という言葉をよく使うが、自分たちはいいことをやっているから、手伝ってほしいということだけでなく、自分たちがパートナーになることで、相手にもどれだけプラスになるかを一生懸命考える。そうすると回り始めるのではないかと思う。その基盤になる軸というのは、ここにある団体で、そこから連携していくことが大事であり、動き始めると自分たちでは及ばない力が生まれてくる場合がある。

（委員長）

高知県の職員には地域づくり支援員がいる。その人たちはいろいろなノウハウを地域で学んでいる。同じように、社会教育の職員あるいは公民館の職員も何を学んでいくか、その職員の学びのシステムがもう少し必要であり、考えていくことが大切である。そんな提案もできるのではないか。

（委員）

先日の公民館のときにも言ったが、高知県は非常に広くて、県下全域をどこか１カ所に集め、しかも継続的にやることになると無理がいく。だから大きい市町村なり、その教育事務所単位ぐらいで年間５回ぐらいの研修会を連続的にやっていく。それを１年間通して勉強し、実践報告等を聞きながら検討をしたり、一緒になって問題解決に知恵を出し合うような学習機会・研修機会というのを提供していけば、社会教育主事という肩書きがなくても、力を持った社会教育担当者なり職員なりが育っていく可能性があると思う。

（委員長）

斗賀野の実践、佐川の職員、あるいはその隣の須崎市吾桑からも学びに来ているような状況を、県内にたくさん増やしていくことができないだろうか。

（委員）

婦人会等の団体を軸とした地域づくりを学んでほしい。隣同士の地域もしくは２つの市町村のどちらかが出かけていって一緒に研修会をやったり、実践経験を持っている社会教育関係団体の人、あるいはＮＰＯの人がその市町村に出かけていき、具体的な事例に基づいて一緒に学びの場をつくったりするなど、問題を解決しながら学び合っていく場がぜひ欲しい。

（委員長）

本当にそのとおりである。１つ方向性が見えてきたように思う。

（休憩）

(4) 地域における学習機会の拡充、関係機関とのネットワークの構築について

（委員長）
　地域が良くなるということと１人ひとりが高まっていくということは相関の関係にある。そういう意味で学習をどう捉えるか。先ほどの婦人会の活動や斗賀野の活動、これ自体も人を育てる機能なので学習であるが、生涯学習と言われる中で１人ひとりが何を学び、どういう力をつけるかという生涯学習の視点も大事である。その１つとして社会人に対する学習機会の拡充もテーマであり、その１つとして県立高校の取組を紹介してもらいながら、どういうふうに学習機会を拡充していけるのかを協議したいと思う。
　併せて、その後大学あるいは社会教育施設の仕組みをどのように考えていけばよいか協議を進めていきたい。

【社会人を対象とした高等学校の取組について】

（委員長）
　学習の機会をどのように保証するかということで、今やっていることを報告してもらったが、質問、意見等、出してもらいたい。
（委員）
　受講生の年齢で60歳というのは分かるが、30歳というのは小さい子どもの子育てを終え、小学校に入学をしたぐらいの子どもを持つ人が、もう１回仕事につく、又は仕事に生かすために受講しているのか。
（委員）
　アンケートの自由記述にもあるが、直接自分の職業に関わって学びたいという人もいる。
（委員長）
　そういう職業と結びついた形で、あるいはそれをより強く意識して講座を組むといった仕組みなどはあるか。
（委員）
　直接個々の職業に対応することは難しいので、自営業の人に役立つ簿記の技術や、最近の情報化に対応するようホームページ作成といった内容で、この２、３年は実施している。
（委員）
　資料２に、人生の先輩として生徒にアドバイスすることについていろいろ書いているが、現役の高校生と直接会話するような場面があるのか。
（委員）
　聴講生と語り合う場というものを年に何回か設けており、最近であれば観月会に聴講生を案内し、月見をして俳句を１首ひねり、全体でお互いに発表して親交を深めるとか、あるいは文化祭で、夜間部の生徒が聴講生から人生の先輩としてアドバイスをもらい、それをまとめて発表するといったこともやっている。
（委員）
　高校生が先生や家族以外の大人と、真剣に話す機会がすごく少なくて、何年も前だが、野市の青少年センターで先輩と語る会のようなものがあり、「家族以外の大人の人とこんなに話したこと、僕初めてです」と言われたことがある。学生の感想というか、受けとめ方はどんな感じか。
（委員）
　やはり、教師が喋るのとは違う受け止め方だろう。教師だと一定指導をするということになるし、子どもも指導を受けているという話になる。ところが、見も知らずのおじさん、おばさんから喋られたら、指導するされるというバリアから離れて、「ああ、そうなのか」とすんなり腑に落ちる部分があるのではないだろうか。
　また、夜間部の聴講生は、夜間給食を一緒にとってもらってもいいという形にしているので、食堂で夜間の生徒と聴講生が食事をとりながら世間話をするといった姿も見られる。
（委員）

資料４の学習に取り組む際の妨げに、費用が掛かるというのがあるが、これについてはどうか。

（委員）

安芸市辺りから来ると通学費用がかかる。授業では、普通教科だったら教科書代と県で定められた年間の聴講の授業料だけなので、想定外にお金がかかるということではないが、全くの無料というわけではない。

昼間の自己啓発モデル事業は無料である。参考書についても準備しているので、その分についての費用は生じてないので通学費用だけだと思う。先ほど言ったように、普段の１年間受ける授業については、費用は受講料当初のものと、あと教材費だけである。

（委員長）

先ほど単位認定の話が出ていた。学びの履歴というか、学んだことを個人の履歴として積み上げていくような仕組みは大事だと思うが、記録のようなことは何かしているのか。

（委員）

１年間学びあげれば、修了証書という形で証明書を出している。

（委員長）

それがさらに生きるような社会づくりが必要だと思う。何か資格になるといった、そういう方向はやはり必要だと思う。

（委員）

教育振興基本計画を作る時にアンケート調査をしたり、検討委員から意見を聞いたが、公民館については、学び直しや学びの深いもの、資格が取れるようなものをやってもらいたいということはかなり出ていた。そういう意味では、この中芸高等学校での学びはとても大事だと思う。

（委員）

今、年をとって大学でもう一度学び直すことが、ブームになりかかっているということも聞いた。引きこもりの人たちも、公民館で卓球やいろいろな趣味の講座を開いたら来てくれるだろうと思っていったら、そんなのを望んでいなかった。引きこもりの経験のある人でも、仕事をしたいと思っている。自分も社会に役に立つということを認めて欲しいという願いを持っている。そこで社会福祉協議会の職員の方がパンフレットを作って、就職のための資格を取る、そういうパソコン講座に参加しませんかということをポストに入れていったら、びっくりするような人が集まったというのをやっていた。結局、こちらがいろいろな講座を構えたり、イベントしたりすることではなく、足を運んで一人一人の思いや願いに沿った企画をしていくことが必要である。

土佐の教育改革の成果が出て、小中学校の校長先生や職員の意識改革も進んできて、学校も垣根が低くなったし、校長会でもこちらが打てば響く。ところが、保育園は違っている。県外で取り組んだすごくいい「10 秒の愛運動」を仕掛けてみたいと保育園の保護者会の代表者会に参加させてもらった。叱る前に 10 秒だけしっかり抱きしめてから語りかけてみようという、その子育ての方向を切り口にして、保育園の子どもたちを中心とした親子の子育てを、公民館で一緒にできないかなと思って、行った。しかし、空気というか何かが違う。もちろん、私と初対面という人もたくさんいるけど、何か小中学校とは違う空気を感じて、そこで提案したこと、これをぜひ保護者会で伝えてください。園長先生もお伝えくださいということでその日は終わった。

園長会では、また園長さんによって全然受け止め方が違う。最初にお願いしたことが伝わってる園と全然伝わってない園もある。なので明日からは実際にでかけて行って、直に園長さんと会って話をして、そのきっかけ、本格的な影絵劇を、準備の段階から一緒にやってくださいということで会いに行くようにしている。一番言いたかったのは、すごくいい取組はそれで本当にいいのだが、学習者が本当に求めているものと結びつけていくにはどうしたらいいのかということだ。自分からトップダウン的に言ってはいけないし、それからやっぱり聞くことによってそれに見合った仕掛け、協力体制、協働ということをどう組んでいくかだと思う。すごく参考になった。

（委員長）

この中芸高校の取組を広げる試みは、ぜひ大事にしたい。地域づくりはとても大事なことであるが、学習要求に全部

応えきれているかというと、必ずしもそうではない。県民の学習要求をどう把握するかということもそうだが、、それに応える多様な学びの機会を用意するという点で、非常に大事な取組である。この取組をもっと増やすことができないだろうか。

（委員）

補足だが資料の５ページに、本校の授業の中身、内容があるが、単位制の学校なので、希望があっても受講者が少ないと開校できないこともあるが、開校可能という予測でこれだけ書いている。

それから、先ほどの費用だが１単位当たり 1,740 円の授業料かかるので、これを高いと言っていたのかもしれない。ただ、費用については県で決まっているものなので、学校がどうにかできるというわけではない。

聴講生は、テストも生徒と同じように受ける。かつては履修習得すると、次年度に受講できなくなるので、テストは受けずに、あるいは受けてもわざと白紙で出して、履修習得をせず翌年も受講するといったようなこともあった。今は、履修修得しても、翌年に再度受講できるようになっている。

（委員）

私は保護司もしている関係で、高校へ入ったけれども中退し、犯罪にかかわる少年の事例を多く抱えている。面接をずっと続けていく中で、就職に関しては、学歴が高校卒業でないと難しいということで、すごく傷ついている子どもがいる。そうしたら、もう１回受検してみる、佐川も定時制があるので挑戦してみると。でも、勉強できないと言うので、佐川町の教育集会所で、不登校の子どもなど指導してくれているところがあるので、もう一度勉強する機会があるとアドバイスするが、そこには行きにくいというようないろんな悩みが出されてくる。定時制をそのまま受検することは、勉強も遅れていて難しいけれど、こういうところで受講していきながら、自らが学んで勉強が理解できたら楽しいということを知って、次に定時制を受検するとか、全日制に行くとかいうように、そういう段階を踏める場所が地域の中にあったらすごく嬉しいと思う。

（委員）

うちの学校は制度的にはまさにそういう学び方ができる制度になっている。履修習得の証明書を出して、履修習得した単位は本校入学時には単位認定しており、入学試験もないので、助走をする気持ちで、まずは数学でも英語でも受けて頑張れば、結果が証明される。それを勢いにして次の年にきちんと入学し直す。今までの単位も無駄にならない。それはまさしく、そういう学び方ができる制度になっている。

（委員）

やはり受け皿が必要だと思う。高校の単位を取ろうと思っても、学力は小学生並みで、足し算、引き算はできるが、かけ算、わり算になったらできない子どもたちは例えそういった学校の単位でも、やっぱり二の足を踏んで行くことができないと思う。そこに、どこからも助（すけ）がないところに、ストライクゾーンに合うようなものを用意していくことが必要だ。

そういう社会教育の必要、ニーズがあるにもかかわらず我々がそのストライクゾーンを用意できていない。これからの若い世代を育てていく時に、高校中退とか、中学でほとんど学力はついていないという子どもたちの学びの要求に合うようなストライクゾーンを社会教育はどう準備していけるのか。中芸高校の取組を聞いていると、そういった仕掛けを社会教育は何かしていかなければならないとすごく感じている。

（委員長）

若者支援の取組は、委員会を中心に熱心にやっているが、そういうところとどのようにリンクしていくかは、社会教育として出せるところだ。

（委員）

支援を必要とする若者が、あまり気おくれしないで、再度勉強してみようという気持ちになれるような場の設定があればよい。若い伸び盛りの力を秘めているにもかかわらず、上の世代がその力を十分に引き出せずにつまずいたままになっている。力がないのではなく、育ちきれなかった部分をどう支援していくのかが社会教育の役割の一つだと思う。そのような試みが若い力を育てていくうえで、これからの地域社会とっても必要な事なのではないか。若い世代が少な

くなっているからこそ、その世代の力を十二分に育てるために、自分たちに何ができるのか、何かいいヒントを出したい。

（委員）

少年ばかりでなく、高齢で刑務所を出所した人も増えており、出所後に仕事を探すといっても、なかなか見つからない。結局、きちんと勉強をして、自分にあった仕事に就けるようにしたいという思いが出てくる。

更生をしていく時の、受け皿というものがすごく大事だし、必要である。

（委員長）

全ての人に、学びを保証するというのは基本中の基本である。そういう中で、学ぶことから社会的に不利な立場にある人たちのことを考えられるのは、社会教育であり、今日の取組や地域づくりをしていく上でも、基本に据える必要がある。

最初に話した健康と労働と人権に関連すると思うが、この中芸高校の取組は県立高校なので少し部署は違うが、もう少しこういうことを伸ばしていける提案が社会教育委員会としてできるのではないかと思う。

【大学などの教育機関の説明】

（委員）

地域課題の解決に向けたリーダー養成をやる時に、県教委もいろんな指導者を養成しているので、同じことをやってはいけないというのがあり、その摺り合わせはしている。それと、県が行なっている様々な講座があるので、そういったところへの参加で連携をしていこうということは考えており、話し合い中である。逆に徳島大学大学開放実践センターの講座は全て、県がやっている徳島県民大学校の単位になる。

（委員長）

県内にも社会教育施設はいろいろあるので、そういった施設とどのように連携しながら、こういった事業をつくっていくか。いわゆる公開講座、生涯学習という世界から、もう少し学び直しだとか職業だとか地域課題だとか、そういうところにシフトしてきている。国立大学、県立大学をからめて、この委員会としてどういう提案なり、方向を出していくかということを改めて考えたい。

【社会教育施設：文学館の説明】

（委員長）

社会教育施設は県内にたくさんある。市町村も持っているが、その社会教育施設の運営というものをどのようにしていけばいいのかも課題である。内側にこもるだけでなく、むしろ外側に打って出ながら、学びと文化の環境をつくる上で大変大事な役割を果たしているという、実にいい例を出してもらった。そこの中で人を育てている機能もあるし、そういうところを非常に短い中で分かりやすく説明してもらった。

（委員）

文学館の取組は最初に言われたストライクゾーンに合うような取組で社会教育施設にはとても大事なことだと思う。市町村ではなかなかこのような闊達な取組ができていないのだが、県内の社会教育施設がお互いの取組を発表し合う場や研修し合う場というのはあるのか。

（委員）

文化財団は、美術館、坂本龍馬記念館などを管轄している。文学館は県内で言うと黒潮町に上林暁館があり、香美市に吉井勇記念館があり、本山に大原富枝文学館がある。それらの施設とはメモリアルイヤーの時はポスターを一緒に作ったり、こちらから講演に行ったりして、タイアップは常にやっている。明日も全国の文学館の大会が当館であり県内の館は全部参加する。そういうところは学芸員もかなり限られているので、相談を受けた時には可能なことはやってい

る。それから、吉井勇記念館とは吉井勇の展覧会の折、短歌大会をやり、若山牧水記念館長にきてもらったり連携している。その時は、香北の中学生に全員投稿してもらった。

（委員長）

文学館のネットワークはあるが、社会教育施設のネットワークはどうなのか。

（委員）

以前はミュージアムネットワークというのがあったが、２年前に運営のことでいろいろなことがあり、今はやっていない。しかし、ネットワークそのものをなくするのはもったいないということで、土佐山内家宝物資料館と自由民権記念館を中心にやっている。しかし、ミュージアムといってもいろんな館があるので、その辺の難しさがある。

（委員）

目的の実現に向けて、どうやるのかという社会教育の視点を生かした社会教育施設の運営のあり方を知りたい。文学館は、何か取り残されたような時代の文学館しか知らなかったが、今の文学館は非常に活性化されている。市町村にもそういった施設はいっぱいあるが、入れ物はつくったもののどうも利用率が上がらない。お金をかけただけで終わっている。活性化のあり方が、文学館が活性化されていく道筋の中に学ぶべきものがたくさんあるように思う。学びの場という具体的な仕掛けよりも、社会教育施設が県民に対し、どのような形で役割を果たしていくのかということを教えてもらいたい。

（委員）

例えば、国道からかなり奥にある施設で、その場所まで行かないと休館かどうかも分からないようなことがある。こんな場合、国道沿いの入り口付近にいつが休館か書いて、案内の矢印があるだけでも随分違うと思う。

大方にある上林暁館も、今はすごく活性化しつつある。大方では、はだしマラソンやＴシャツアート展があって人が大勢来るが、その日が休館日だからといって休むのはもったいない話である。例えば大原富枝文学館であれば、桜市と四季菜館をリンクして、四季菜館で食事したら次はここがありますよみたいなにつなげるとか、産業課と教育委員会が連携してつながることが必要ではないか。教育委員会は教育委員会内だけで考えていることが多いと思うが、特に市町村の場合は教育委員会と行政部局が壁を取り外して連携していくことで、そういう工夫ができる部分がいろいろあるのではないかと思う。

（委員長）

社会教育施設は運営者に任せっきりになっているところがあるので、関係機関が連携それをつなぐような研修をするのが県の教育委員会の仕事である。主事等研修も大事だが、施設の職員研修にも力を入れていかねばならない。

（委員）

先日、文学館の全国大会の関係で市内のホテルに話をしに行ったのだが、「文学館という建物か何かがあるのですか？」と尋ねられたり、タクシーの運転手さんでも知らない人がいる。まだまだ知られていないのが現実である。

（委員長）

学びの気風だとか機運だとか、盛んに県も言うが、まずその下地の部分でみんなが関心を持てるような環境を醸成することが非常に大事だと思う。

３．閉会

高知県教育委員会事務局生涯学習課課長補佐挨拶